【特集：現代アジアにおけるグローバル化と排他的ナショナリズム】

序言

中溝和弥

グローバル化の時代が唱えられて久しい。冷戦の終焉後、国際関係を捉える概念の一つがグローバル化であった。旧ソ連圏の崩壊に伴う市場の拡大と金融の自由化は、ヒト・モノ・カネ・情報の加速度的な移動と相俟って、国民経済、そして国民国家の枠組みを大きく揺さぶるかに見えた。

しかし、現在のところ、国民国家の枠組みは崩れていない。国民国家は意味を失うどころかこれを支えるナショナリズムはより強くなり、愛国を掲げる政治勢力が世界各地で勢力を伸ばしている。愛国の内容も様々であり、中国のように排外的なナショナリズムを強く打ち出す政権もあれば、欧米のように移民排斥を訴える政治勢力が台頭する事例、さらにはインドのように「国内の敵」を見つけ出して宗教的少数派を弾圧してきた政治勢力が権力を獲得した事例もある。このような排他的ナショナリズムが、グローバル化が進展する世界でなぜ強まっているのか。本特集においては、現代アジアの事例に基づいて、この問題を考えたい。

＊

本特集は、2014年11月29日に開催された西日本大会共通論題企画として最初に立てられた。収録された四本の論文は、共通論題での発表に基づき、コメンテーターを務めた藤原帰一（東京大学）、松里公孝（東京大学）両氏のコメントを参考にしつつ改訂を行った論考である。取り上げられたインド、インドネシア、タイ、中国は、政治的混乱が経済成長に影響を及ぼしているタイを除き、いずれも2000年代に高成長を経験し、いわばグローバル化の勝ち組と目される諸国である。これらの諸国において、ナショナリズムはどのような展開を見せているのか。本特集では、外国勢力の排撃を特徴とする排外的ナショナリズムや、国内の少数派を排除する排他的ナショナリズムを、「他者を排除する」という共通項でより広く捉え、特集タイトルを「現代アジアにおけるグローバル化と排他的ナショナリズム」とした。その上で、排他的ナショナリズムの諸相を各国の事例に基づいて検討した。各国の事例分析を簡潔に紹介しよう。

インドを取り上げた中溝論文「経済成長と宗教ナショナリズム——2014年総選挙から見たインド社会」は、昨年行われたインド下院総選挙の分析に基づいて、ムスリムを中心とする宗教的少数派の排除が容認されたのかという問いを立てる。全国から村落レベルに至る分析において、ヒンドゥー至上主義者の勝利は、経済成長への期待が大きく貢献し、少数派の排除を容認したとまでは言えないものの、緩やかな形で暗黙の支持を与えたと分析する。そのうえで現政権が十分な成果を上げられない場合、少数派に対する暴力的な弾圧

が行われる可能性は存在すると指摘する。

インドネシアを取り上げた本名論文「インドネシアの選挙政治における排他的ナショナリズム——2014年プラボウォの挑戦」は、2014年大統領選挙におけるプラボウォの予想を超えた善戦を分析するなかで、プラボウォが大々的に展開した排外的ナショナリズムの陰に隠れる国内社会の分断を指摘する。すなわち、プラボウォを支持した社会的・宗教的保守層や経済的富裕層が恐れたのは、当選したジョコウィが動員した大衆であり、大衆の政治的覚醒が彼らエリートの地位を脅かす可能性を秘めているからこそ、プラボウォを支持したと分析する。

タイを取り上げた玉田論文「タイにおける脱民主化とナショナリズム」は、2005年以降のタイにおける政治的混乱を分析するなかで、選挙によって選ばれた政治勢力を打倒しようとするデモ隊（黄シャツ隊）、司法、軍部が掲げる勤王主義が国王と国民の分裂を生み出しかねないと指摘する。タイ政治に革新をもたらしたタックシン政権は主に農村部を支持基盤とするが、これに反対する王党派や都市中間層は、勤王主義を掲げて三度にわたって政権を転覆してきた。タイ社会の分裂は深刻であり、国王を軸に作られてきたタイのナショナリズムを揺るがす危険性を孕むと指摘する。

最後に中国を取り上げた江藤論文「中国の公定ナショナリズムにおける反「西洋」のダイナミズム」は、中国における排外的ナショナリズムの高揚を、ナショナリズムの歴史的展開を踏まえて分析する。中国ナショナリズムは、①民族アイデンティティー、②社会主義、③経済成長、④大国意識という四つの要素から構成され、これらが反「西洋」意識と交差することによって、時代ごとの特徴を生み出してきた。これらの歴史的展開を踏まえることによって、2000年代半ばの排外的ナショナリズム（反日デモ）の高揚、そして現在、習近平政権が進める「中国の夢」の意義もよりよく捉えることが出来ると指摘する。

＊

本特集を構成する四本の論文は、いずれも流動性の高い現在進行形の事態を直接の対象としている。グローバル化の一つの特徴は、変化のスピードの速さであるが、ここで取り上げた各国も、かなりの速度で変化している。その意味で、本特集は現時点でのスナップショットとも言えるが、急速に変化する過程において、スナップショットを確実に取っておくことが重要であることは言うまでもない。グローバル化が進展する世界における排他的ナショナリズムの高揚の一端を、ご理解いただければ幸甚である。

（なかみぞ・かずや　京都大学　nakamizo@asafas.kyoto-u.ac.jp）